



農研機構のひと
work & life interview 2022

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
本部人事部 ダイバーシティ推進室 Diversity and Inclusion Section
〒305-8517 茨城県つくば市観音台3-1-1 E-mail: f-support@affrc.go.jp
TEL:029-838-7307 FAX:029-838-8955 <https://www.naro.go.jp/diversity/index.html>



農研機構のひと

work & life interview 2022



多様な人材を活かし、 新たなイノベーションを生み出します

イノベーションの創出とは、知識を知力に変え、その知力を新しい価値の創造に繋げることです。現代社会において、新しい価値の創造には人材の多様化と融合が極めて重要です。このため、研究機関においても、性別・国籍・年齢だけでなく、農学・工学・情報・経済学などの様々な専門知識や、経営・企画立案・知財標準化・事業開発などに関する経験など、多様性を尊重し、それらを融合する組織風土を醸成することが必要です。農研機構は、多様な知識・経験を有する人材を活かし、一人ひとりの能力を最大限発揮できる環境を整えるとともに、人と人、そして組織と組織の間の連携を徹底的に強化して、イノベーション創出を加速します。

上記の理念の基で、農研機構では、多様な専門分野・多様なキャリアの人材の採用を進めるとともに、女性・外国籍職員の積極的採用にも取り組んでいます。さらに、子育て・介護などに従事している職員も働きやすい環境を提供するため、一時預かり保育室を開室するなど、職員のワークライフバランスの向上を推進し、女性活躍推進企業認定「えるばし（3段階目）」や子育てサポート企業認定「くるみんマーク」を取得しています。農研機構はダイバーシティを尊重することによってイノベーション創出を加速し、農業・食品分野における「Society 5.0」の早期実現を目指します。

国立研究開発法人
農業・食品産業技術総合研究機構

理事長 **久間 和生**
KYUMA Kazuo



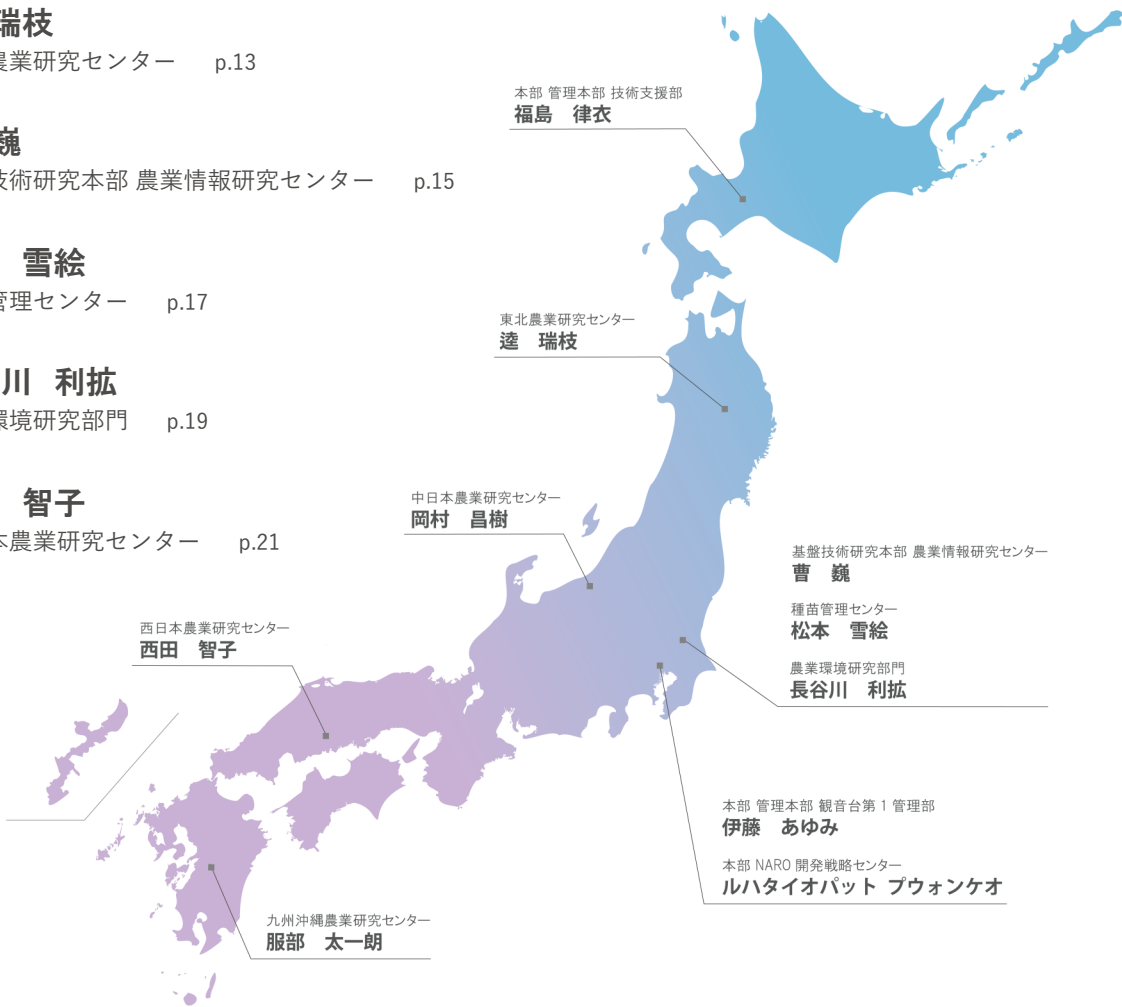
Contents

- 01 **岡村 昌樹**
中日本農業研究センター p.03
- 02 **伊藤 あゆみ**
本部 管理本部 観音台第1管理部 p.05
- 03 **ルハタイオパット プウォンケオ**
本部 NARO開発戦略センター p.07
- 04 **福島 律衣**
本部 管理本部 技術支援部 p.09
- 05 **服部 太一朗**
九州沖縄農業研究センター p.11
- 06 **達 瑞枝**
東北農業研究センター p.13
- 07 **曹 巍**
基盤技術研究本部 農業情報研究センター p.15
- 08 **松本 雪絵**
種苗管理センター p.17
- 09 **長谷川 利拡**
農業環境研究部門 p.19
- 10 **西田 智子**
西日本農業研究センター p.21

2022年6月から2022年12月に
取材を行いました



農研機構ダイバーシティ推進キャラクター
おむすび なろりん



本部 管理本部 技術支援部
福島 律衣

東北農業研究センター
達 瑞枝

中日本農業研究センター
岡村 昌樹

西日本農業研究センター
西田 智子

九州沖縄農業研究センター
服部 太一朗

基盤技術研究本部 農業情報研究センター
曹 巍

種苗管理センター
松本 雪絵

農業環境研究部門
長谷川 利拡

本部 管理本部 観音台第1管理部
伊藤 あゆみ

本部 NARO 開発戦略センター
ルハタイオパット プウォンケオ

Okamura Masaki

岡村 昌樹

中日本農業研究センター
水田利用研究領域 主任研究員

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程を修了後、2015年に農研機構作物研究所に任期付研究員として採用。2018年から現職。



きっかけは北海道への家族旅行

研究者を志すことになったきっかけですか？
ちょっと早いんですけど、小学生の時の、北海道への家族旅行ですね。その時食べたメロンのおいしさに衝撃を受け、それが農業研究者を目指すきっかけになったと思っています。幼少期は神奈川県三浦市に住んでいたのですが、ご存じかと思いますが、三浦市にも農地はたくさんあり、三浦産のメロンを口にすることもありました。しかし、北海道で食べたメロンと三浦市で作られるメロンの味の違いを実感し、食品としての植物を対象とした研究に大いに興味を持ちました。作物が作られる気候・風土の影響もあるんでしょうけど、その時に、品種改良などの作物に関する研究に魅力を感じました。しかも、身の回りに農地がたくさんある環境だったので、農業に関することを将来仕事にするといったことに対して、特に違和感も感じませんでしたね。その後、小学校5年生の時に横浜市に引っ越したのですが、それまで当たり前だった、日常的に土いじりができる環境から離れてしまうことによって、さらに農業に対する思いも強くなりました。その思いはぶれることなく、中学3年生の時点で将来は農学部に入學し、農業の研究者になることを決めていましたね。子供のころから農業って、日本の産業の中でも最も重要な産業の一つであると思っていましたから、そこに対して貢献できることも魅力だったんだと思います。

自分の夢にまっしぐら！
これまでも、これからも
日本の農業のために貢献し続けたい。

水稻の研究をスタート

大学は中学生時代から決めていた通り、何の迷いもなく農学部に入學しました。研究室に入る前まではサッカーと野球のサークルに入るなど、普通の学生時代を送っていました。4年生から研究室に入りましたが、最初から博士の学位を取ることを目指していました。研究内容は水稻の茎や葉にたまる糖やでんぷんの代謝についてです。基礎的な研究ではありましたが、糖やでんぷんの代謝は水稻の登熟に大きく影響し、生産性に直結することなので、応用にもつながる研究です。その研究テーマで学位を取得しました。また、学生時代と農研機構に就職してからの研究成果で、日本作物学会の研究奨励賞（イネの茎葉部および穎果におけるデンプン・ショ糖蓄積に関わる分子生理・生産生理学的研究）も受賞することができました。

農研機構への就職

大学の研究室の先輩から声をかけていただき、作物研究所（現・作物研究部門）の研究室を訪問したのを契機として、任期付職員に応募することになりました。先輩が声をかけてくれたきっかけですか？やはり学生時代から積極的に学会に顔を出し、この分野の仕事について存在を認識しても

らっていたことが大きいんじゃないでしょうか？学会などに参加してネットワークを広げておくことは本当に大切だと思います。ちょうど訪問した研究室で大きなプロジェクトが始まり、その仕事に私の大学院での研究がぴたりとマッチしたこともあり、任期付職員として採用されました。先輩から声をかけてもらわなければ、採用されることもなかったのですから、やはり人と人とのつながりは大切ですね。

就職半年でピンチとチャンス

でもその半年後にちょっとしたピンチに見舞われました。所属研究室の上司が、「君なら大丈夫！」という言葉と、大きな予算を残して、大学に転職してしまったんです。いきなり就職したばかりで、上司がいなくなり戸惑いましたが、研究の進め方自体は、すでにトレーニングを受けているという自負がありましたし、周りの方々の助けもあり、思う存分に研究に打ち込むことができました。ポジティブな性格に助けられたところもあったのかもしれませんが、農研機構では特に若手の研究者が研究に集中できる環境があるのがありがたかったですね。しかも、大きなプロジェクトであっただけに、農研機構の研究者だけでなく、農研機構外の多くの研究者とも一緒に仕事をする機会に恵まれました。この時作ったつながりは、予算獲得や研究を進めていくうえで、今でも十分に生きていて、大きなチャンスをもたらったと思っています。

子育ては輪番制

パーマネントの職員になるタイミングで中日本農業研究センター上越研究拠点に異動になりました。異動して半年後に子供が生まれました。今、子供は4歳と2歳の二人姉弟です。妻がやはり農研機構の研究職員ですので、子育ては互いに分担して行っています。私自身、寝つきが悪いということもあり、子供の寝かしつけは私の主担当です。妻が寝かしつけるとどうしても寝落ちしてしまうようですが、こんなところで私自身の寝つきの悪さが活かせるとは思っていませんでした。寝かしつけている時間は、私にとっても思索の時間です。子育てをしていると、どうしても仕事に割ける時間には制約があるため、日中にゆっくりと仕事について考える時間を作るのは難しいです。そこで、子供を寝かしつけるためのこの静かな時間を利用して、研究の段取りを考えたり、研究の構想を練ったりしています。そのあと、妻ともコミュニケーションをとるようにしています。妻も研究者ですので、どちらかだけが我慢する、といった状況は作りたくないですからね。

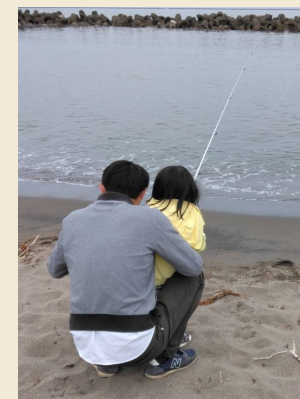
子供が熱を出して急なお迎えが必要な時は、前回妻が迎えに行っていれば、今回は私が、といったように可能な限り輪番制を取っています。そのほかのことでも、輪番制を取っていることは結構ありますね。子育てをしながら共働きしていくことは確かに大変です。毎日があっという間に過ぎて行ってしまう、子供を中心として時間が回っていきます。でも、周囲の方の理解にも助けられていますし、何より子供たちがかわいくて仕方がないですね。



My favorite things



研究試料の運搬に使っている愛車。機動力重視です。



北鱗会（上越研究拠点の釣り部？）のキス釣り大会に家族で参戦しました。結果は惨敗でしたが、釣った魚を美味しく頂き、子供たちは大喜びでした。



上越は山あり海ありで子供たちと遊ぶ場所に困りません。写真は妙高高原の公園で。



Ito Ayumi

伊藤 あゆみ

本部 管理本部 観音台第1管理部

総務課新橋管理チーム 主査

武庫川女子大学音楽学部演奏学科を卒業後、某大学法学研究科助手を経て、2016年農研機構本部人事部人材育成室に採用。2019年農林水産技術会議事務局研究調整課管理・厚生係へ転籍、2021年より現職。



伊藤あゆみ 爆誕！

懐メロが好きな両親の影響で、子供のころから音楽を聴き、ピアノを弾いていました。中学生になって、クラシックが好きになり、高校生になる頃には音楽を専門的に学びたいと思い、声楽をはじめました。高校は大阪の女子高だったので笑いには厳しく、“笑いを自らとりに行く”という積極性が身につきました。希望どおり大学では音楽部演奏学科で声楽を専攻しましたが、勉強することが目的だったので、将来の職業として考えたことはありませんでした。大学は音楽に専念でき、互いに切磋琢磨できる環境ではありませんでしたが、同時に互いがライバルでもある、厳しい競争社会でした。同期生や先生も個性的な人ばかりなので、埋もれてしまわないよう、私も自己主張することを学びました。また、公開レッスンの授業では人前で先生から厳しい指導を受けるため、強い人間に鍛えられました。芸術で成功するには能力的な才能もちろん必要ですが、もうひとつ、“自分には才能がある”と信じ込み、努力し続ける才能も必要なことに気づきました。私にはどちらもありませんでしたが、だからこそ、ひとつの分野を極めていく方へのリスペクトを持つようになりました。

忘れられない人生経験

普通の就職を考え、大学2回生からインターンに率先して参加しました。また、この頃から少しでも就職を有利にするため、履歴書に記載して自

己アピールとなる資格をたくさん取得するようになりました。資格取得は趣味となって、現在も続けています。

また、海外のバックパッカー旅行に憧れ、初めてひとり旅でタイのバンコクに挑戦しました。しかし、初日から道に迷ってしまったのに、道行く人がみんな詐欺師に思えて、助けを求められませんでした。途方に暮れていると、現地の人々が英語も話せないのに、身振り手振りで道を教えてくれました。人の優しさに心が震え、同時に自分の未熟さや、異国の地での心細さを思い知る良い経験となり、海外のひとり旅が好きになりました。今でも毎年夏季休暇はどこかへ旅立っています。単独での旅行は何か起きても自分で解決しなければならないという緊張感と、現地の方との交流があつて、“生きてる！”ということを実感します。

初めての就職

就職では、生きがいと働きがいは違うと割り切り、生活するために働こうと考えました。しかし、お金にならない芸術に身を費やしてきたので、金銭的利益を追求する組織で働くことに抵抗を覚え、お金以外のものを追求するピュアな職業を支える仕事に就きたいと思いました。また、大学での経験から、ひとつの分野を極めた方に対するリスペクトがあったため、大学職員や公的機関を中心に就活を始めたところ、学校推薦で関西の大学の助手（3年任期つき）の求人を見つけました。他の内定先と比較し、この仕事は今しかでき

ないと考え、就職することにしました。

大学助手の業務では、もっぱら文献・講義資料の複写やPDF作成をしていました。とてもゆとりがあり、先生方も優しく、働きやすい職場でした。とても楽しい毎日ではありましたが、社会人としての自分に自信が持てなかったこと、また別室で働く事務職員の方々が頼もしく見えたことから、任期を終えたら補助的業務よりも主体的に業務ができるポジションを目指そうと思いました。

農研機構という職場

大学の先生方が素敵だったので、引き続き研究関係の職場で働きたいと考え、他の大学や農研機構を含む研究機関のポストを探し、最終的に農研機構に転職することにしました。農業が営まれる風景や農村の景観は、ベートーヴェンの『田園』やミレーの『落穂拾い』など芸術に取り上げられ、人の心を動かす美があると考えたからです。

農研機構では本部の人材育成室に配属され、人材育成のための研修などを担当しました。入ってみると期待していたイメージとはだいぶ異なりましたが、職場に老若男女がいることはすごく良いと感じました。前職では同室には同年代の女性だけでしたし、アフターファイブの飲み会も皆無でした。農研機構では同室に経験豊富な先輩職員がいて丁寧に仕事を教えてくれますし、アフターファイブは呑みに行ったり、カラオケをしたりする毎日でした。おかげで、心を開いて楽しく仕事をするようになり、定時退所日は定時に鍵盤ハー

モニカを吹きました。こんなにリラックスして働くようになるとは、想定していませんでした。

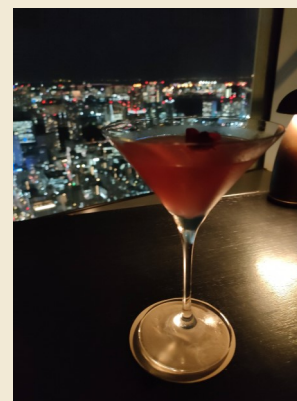
江戸はええど！東京勤務

人材育成室で3年働いた後、霞が関の農林水産省農林水産技術会議事務局（技会）へ転籍しました。技会では研究調整課の総務班に所属し、栄典表彰サービスの仕事や研修を担当しました。仕事の量が多くて驚きましたが、都会生活ができることを心の支えとして元気に働きました。この職場では人脈が増えまし、国と比べて農研機構の仕事には自分たちで考える自由があるということに気づくことができました。また、コロナ対応に派遣された職員が帰還した際の慰労イベントを企画し、途中で鍵盤ハーモニカを演奏したところ、とても喜んでもらえました。音楽の力は偉大です！

技会で2年働いた後、農研機構に戻り、現在の職場である管理本部新橋事業場に赴任しました。ここでの主な仕事は調達ですが、人が少ないので庶務・会計の仕事も担当しています。新しい事業場で、仕事のやり方が定まっていないことが多く、毎日、手探りで進めています。スタッフには外国人や民間企業を退職して来られた方が多いため、農研機構内での常識が通用しません。今後は農研機構にも外部から転職してくる人材が増えることが予想されますので、外部から来た人でもすぐに馴染めるように、効率的で分かりやすい業務フローを構築しなくてはいけないと感じる今日この頃です。



My favorite things



仕事帰りのお酒は幸せです！



職場のみなさんとは、プライベートでも一緒に旅行に行くぐらい仲良しです！



休日は近所の子供動物園に散歩に行きます☆



海も山も大好きです！（小笠原）



心の源泉は芸術。お金以外のものを追求しているピュアな職業を支えたい！

Lurhathaiopath Puangkaew

ルハタイオパット プウォンケオ

本部 NARO開発戦略センター

主任研究員

東京農業大学国際バイオビジネス学専攻博士後期課程を修了後、東京農業大学国際バイオビジネス学科、筑波大学生命環境系、農研機構食農ビジネス推進センター、農研機構企画戦略本部勤務を経て、2020年から現職。



海外への好奇心と奨学金が 来日を後押し

出身はタイのバンコクです。幼い頃は、おしゃべりなおしゃまな子供で、“学校の先生ごっこ”が好きだったことを覚えています。英語教育は幼稚園の時から受けており、小学生の一時期英語嫌いになったことはありましたが、中学校からは英語が好きになり、海外への興味もわいてきました。大学は先に進学していた従兄に勧められ、カセサート大学の経済学部に入りました。しかし、1年通ったところで、大学の友人から日本の東京農業大学（農大）で留学生に対する奨学金があるという情報を得ました。英語が好きだったこともあり、海外への好奇心が人一倍強かったので、日本語を習ったことがないにも関わらず、その友人と一緒に農大の奨学金へ応募しました。残念ながら友人は不合格でしたが、合格した私は農大の1年生として来日し、国際バイオビジネス学科で農業経済や農業経営を学ぶことになりました。授業は日本語だったので、日本語を一から学びましたが、役に立ったのは学校の授業ではなく、もっぱらカラオケでした。友達と一緒にカラオケに行っては、2000年前後の曲をたくさん唄い、多くの言葉を覚えたのは良い思い出です。農大で4年間勉強したのち、もう少し海外での勉強を続けたいと思い、引き続き農大からの奨学金を得て修士・博

士課程の勉強を続けました。博士課程では、タイの食生活の変化と要因について計量経済学的手法で研究を行っていました。学位を取得したことで、自分にできることは研究しかないと思い、研究者の道を進むこととしました。

敷かれたレールに乗っていい

学位を取得したのは、東日本大震災の年でした。心配したタイの親からも航空券が送られてきて、帰国するように言われました。しかし、もう少し日本で学びたいとの思いもあり、一時帰国して心配する親をなんとか説得して日本に戻ってきました。博士課程を修了した後は農大で研究員になることを予定していましたが、研究を中心とした継続的な支援を目的とした「東日本支援プロジェクト」が農大で開始したこと、被災地にかかわる仕事をする事になりました。学生ボランティアを何度も被災地に連れて行き、農家の被害状況の調査や、農地の放射能測定、農作業の手伝いなどを行いました。このプロジェクトにかかわることで、日本の農家のおかれている状況への理解も深まり、農業経営の観点からも多くを学ぶことができました。その後、筑波大学（筑波大）の助教のポストの公募があり、指導教授から応募するように強く勧められ、2年半の任期付き助教

のポストを幸いにも得ることができました。筑波大では、農業経営についての知識も持った職員を求めているため、学生時代に学んだ消費に関する知識に加え、震災関係の仕事を通じて農業の現場を知ったことが大きな強みとなったと思います。筑波大では、農業経営研究や土地利用型作物を対象とする革新的技術体系の経営評価を行うプロジェクトに参画するとともに、授業も担当しました。子供のころに楽しんだ“学校の先生ごっこ”に繋がった気がしました。筑波大での任期が終わるころに、農研機構で研究職員の公募が出ていたので応募したところ無事に採用されました。これまで、何度か進路について考える機会がありましたが、大学時代の指導教授から言われた「敷かれたレールに乗っていい」という言葉に従い、目の前に与えられたことにその都度チャレンジしてきました。頼まれた仕事を断ったことがありません。どんな仕事でも、努力すればそれが自分の糧となり、次のステップに繋がっていくという実感があるからです。

広い視野で仕事をすることの 楽しさを実感

農研機構での最初の配属先は食農ビジネス推進センターでした。そこでは、農研機構が開発した品種や技術の普及・実用化のためのマーケティング調査を行っていました。農研機構本部農業経営戦略部に異動になった直後に2人目の子供を出産し、半年間の育児休業（育休）を取得しました。育休から復帰した後、現在所属している農研機構本部NARO開発戦略センター（NDSC）に着任しました。NDSCでは将来を見据えた研究開発戦略の策定に携わっています。農研機構全体の仕事を俯瞰して、様々な情報を収集して戦略を立てると

いったことをしています。農研機構が開発した温室効果ガス削減技術と温暖化への適応策のアジアへの展開に向けた取り組みも行っています。農研機構が社会に対して、国内だけでなく国際的にもいかに貢献できるか、という観点で仕事をしているので、本当にやりがいがあります。それに農研機構には様々な分野で、すごい方がたくさんいるので、多くの学びがあります。いずれはまた研究に戻って、長期在外研究にチャレンジすることも希望しています。

ダイバーシティ

多様性が家族の基本

結婚したのは、筑波大に勤務していた時です。夫は農業をしながら、主夫として子育てをはじめとする家事全般を担当してくれています。外で働いているのは私になります。子供は6歳の男の子、3歳の女の子、そして10か月の男の子の3人です。平日は夫が家事全般を行ってくれるので、私は休日に料理をしたりしています。子供は夫とは日本語で、私とはタイ語で会話するように自然となりました。農研機構に就職してから2人の出産をしましたが、その都度、半年ずつ育休を取得しました。妊娠したことを報告した時も、職場の方には快く受け止めていただき、育休も取りやすかったです。日本では、出産手当をはじめ、様々な手当もあります。また、農研機構にはワーク・ライフ・バランスに配慮した様々な制度があり、子育てをするうえで、本当に助けられています。育休の間は、代替職員の雇用もありますし、子育て中の研究職員に対しては、研究支援要員雇用のための資金援助もあり、私も支援を受けました。子育てをしていて、これまでこれと言って困ったことはなかったですね。とても働きやすい職場環境で、充実した生活を送っています。

日本語はカラオケで勉強。
どんな仕事でも努力すれば糧となって
繋がっていく！



My favorite things



ヨーロッパでのシャインマスカットの嗜好性調査。



北海道の流水。暑い国生まれなのに、寒いところが大好き。



子供たちへの食農教育

本部 管理本部 技術支援部

北海道技術支援センター 科員

2003年、農研機構野菜茶業研究所（三重県津市）に採用。
2008年、北海道農業研究センター（札幌）業務第1科に異動。
2016年から第2業務科に科間異動し、現在に至る。



進路決定は、職人への憧れから!?

昔から、いわゆる”職人“に対する憧れと、後継者不足の職業に対する思いがあったのですが、農業の後継者不足を知ったことをきっかけに、農業の現場に近いところで働きたいという思いが強くなりました。高校卒業後、農業大学校養成課程で2年間、さらに研究課程で2年間学び、その後、農事組合法人職員と愛知県の農業試験場の臨時職員を経て、24歳の時に農研機構に就職しました。

最初の勤務地は、三重県にある野菜茶業試験場（現・野菜花き研究部門）でした。その当時、技術支援部には女性が一人もいなかったのも、そもそも採用されるのかすら分からない中ダメもとでチャレンジし、無事に採用となりました。着任時、とても緊張しましたが、周りの方々が本当に優しくて面白くて、すぐに打ち解けることが出来ました。6年目に北海道農業試験場（現・北海道農業研究センター：北農研）に異動となりました。北農研での仕事は、私にとっては新しいことの連続で、自分自身の視野を広げるのに役に立っていると思っています。

機械のメンテナンスだけでなく、自分自身のメンテナンスも

北農研での業務は本当に多岐にわたっています。春から秋にかけては基本的には外作業です。耕起にはじまり、施肥、播種、薬剤散布などの圃

場管理、それからもちろん収穫、収穫物運搬、研究者のデータ取得のサポートなどを行います。その他、溶接作業や簡単な設備の修理などもあります。また、北農研では広大な圃場もあり大型機械の操作をすることもあります。私も、大型機械をはじめとする各種免許を取得しました。それから、北海道ならではの、雪が降ると除雪もしますし、冬には屋内で機械のメンテナンスなどもします。

支援部の仕事は力仕事もありますし、体力勝負という場面もやはりあります。もともと体を動かすことが大好きなので、子供が生まれるまでは、フットサルや登山などをして、体力には自信がある方でした。子供が生まれてからは、なかなかまとまった時間を作ることができないので、隙間時間を見つけては、ストレッチや体幹トレーニングなどで腰痛対策などを行っています。年を重ねるにつれて、自分自身のメンテナンスも大切だと感じています。

子供の笑顔と周囲の理解が子育て・仕事の両立の支えに

子供は3歳、6歳、10歳と三人います。わが家の子育ての方針は、子供が機嫌よく笑顔で一日をスタートできるようにする、ということです。家事の途中で「母ちゃん、母ちゃん」と呼ばれては家事が進まない！とイライラしてしまうので、思い切って朝食準備や洗濯などの家事は夫に任せ

て、私は子供の朝支度を担当することになっています。夫の協力なしでは仕事には行けないなとつくづく思います。今はまだ子供たちも小さいので、子供を中心に、子供のペースを乱さないように注意しながら、仕事を含めた生活全般を回していますが、今も最善策を模索中です。それから、育児休業も、それぞれの子供について1年ずつ、合計3年間取得しました。今も育児時間制度を利用して、時短勤務をしています。それでも子供のことでから熱を出したり、体調を崩したり、どうしても休まざるを得ないこともあります。が、「すぐに行ってあげな。」と声をかけてくれたり、「残っている作業はこちらで対処しておくから。」と、仕事のフォローをしてくれる仲間や上司がいてくれて本当に助けられてばかりです。こういう職場の雰囲気が支えになっていて、いつかは私もフォローできる側にまわれればと思っています。休日は、「とにかく、子供と遊ぶ!」です。雨の日も風の日も雪の日も子供たちは関係なく遊ぶので、一緒に遊んで一緒に爆睡しています。夏場はキャンプに行って、家族みんなでリフレッシュするのが我が家の楽しみです。

人とのつながりが、私の人生の糧

人との付き合い方って、それぞれだと思いますが、私は、とにかく人と関わっていくことが大好きで、それが私自身の人生を豊かなものにしてくれていると思っています。基本的には、誘われた

ら断らないタイプです。独身の頃は私がバイクに乗ると聞いて、誘ってくれる人がいれば、ツーリングにもすぐ行くし、登山が好きだということを知って、誘ってくれる人がいれば、登山にもすぐ行く、という感じでした。これまでやってきたことだけでなく、新しいことにもたくさんチャレンジしてきました。三重の研究所でも野球やサッカーをしたり、そうそう、こちらに来てからはサケ釣りもしました！楽しかったですよ。興味があっても、一人ではなかなか踏み出せないことも、経験者となら、チャレンジできるし、そこで交流も広がるって楽しいです。さらに、職種を問わず職場の方との交流が広がることによって、次の仕事にもつながっていくので、遊びであっても全力投球です。

若い方へのアドバイス

子供ができるたびに、仕事を続けるかどうかということを悩んだり、いろいろな悩みを抱えてきました。男性との体力差、ライフステージが変化することへの不安、異動など、考えはじめると、悩むことばかりです。そんな時、私の場合は、一人で思い悩むのではなく、その時その時に信頼できる人に相談しています。最終的に、決断するのは自分ですが、自分の中で整理することができるので、相談すること、そして相談できる人がそばにいることは何事にも代え難い大切なことだと思います。そのためにも、よりよい人間関係の構築は大事ですね。



My favorite things



北農研の仲間と一緒に登ったコイカクシュサツナイ岳。朝5時に見た雲海が感動的で忘れられません。もう一度見たい！



夏の楽しみは家族で行くキャンプです！



↑収穫直前の稲「とうとう収穫！」ワクワク・ドキドキの時です。



刈取り後、稲架（はさ）掛け完了。達成感！と同時に、雪降る前に何とかしないと！という思いが入り混じります・・・。脱穀、唐箕・・・と作業はまだまだ続きます。



人とのつながりが人生を豊かにする。 悩みがあったら、すぐ相談！

Hattori Taiichiro

服部 太一朗

九州沖縄農業研究センター

研究推進部事業化推進室 事業化推進チーム長

東北大学卒業。鳥取大学大学院で修士・博士課程を修了。鳥取大学乾燥地研究センター、東京大学附属農場での研究員を経て平成21年に九州沖縄農業研究センターに採用。種子島でサトウキビ育種を担当し、令和2年より現職。



きっかけは一冊の本との出会い

中学生のとき、遠山征雄先生が執筆した「沙漠を緑に」（岩波新書）という本を読みました。当時は、環境問題が社会的にクローズアップされていたこともあり、将来、沙漠化問題に貢献する研究者になりたい、という夢を抱くようになりました。遠山先生のいる鳥取大学に行きたいという気持ちはありましたが、当時は新潟に住んでいたもので、東北大学に進学しました。大学では合気道部に所属しましたが、その目的は将来、沙漠で自分の身を守れるようにするためでした。

修士課程から鳥取大学に進学し、遠山先生の研究室の隣の稲永忍先生の研究室に入りました。恩師である稲永先生は乾燥地作物生理学の研究を行っており、当時の自分の興味に近い分野でした。畑の作物にケイ酸を投与すると、根を伸ばして水を吸いやすくなることで耐乾性も強まることを明らかにし、学位を取得しました。その間に、中国の黄土高原やタクラマカン砂漠を訪れる機会にも恵まれ、自分の研究がどのように現場と繋がっているのかを考える良い機会となりました。

就職の決め手は妻のひと言

学位取得後も、鳥取大学の乾燥地研究センターで研究員を2年半務めましたが、東京大学附属農場でのバイオエタノール原料用作物の研究員（任

期あり）に応募したところ採用されました。バイオエタノール原料用作物は基本的に食料生産に適さない農地で作るものなので、これまでの乾燥地の研究を応用して取り組むことが可能でした。そこでは、サトウキビなどイネ科作物の研究を行いました。次の就職先として、最初は大学のポストばかりに応募していましたが、なかなか採用してもらえませんでした。そこで、研究機関まで対象を広げて応募したところ、農研機構九州沖縄農業研究センター（九沖研）のサトウキビ育種グループ（種子島に所在）のポストと某私立大学北海道キャンパスのポストの1次試験に合格しましたが、偶然にも同じ日に面接試験が重なり、どちらを受けるか悩みました。そこで、妻に相談したところ、「あったかい方がイイ!」と即答され、農研機構を選択しました。無事に採用され、2009年から種子島で、サトウキビの研究を始めました。

新品種「はるのおうぎ」の開発

沖縄や鹿児島は熱帯産のサトウキビにとっては寒く、地力は低く台風もあり、収量は不安定です。そのため、頑健な多収品種の開発を目指しましたが、多収にすると糖度が低下し、製糖工場が受け入れてくれません。収量も糖度も高い品種を開発する必要がありました。毎年、150種類の組み合わせで交配し、11年かけて、ようやく理想に近い新品種「はるのおうぎ」を開発できました。

事業化推進室への配属

「はるのおうぎ」を品種登録出願した翌年、九沖研の事業化推進チーム長の話が飛び込んできました。区切りの時期だと思って、あまり迷わずに承諾しました。事業化推進室の仕事は、農研機構の研究成果を普及させ、社会実装につなげることです。しかし、自分には企画調整部門の経験がなく、また、新設されたばかりの部署でもあったため、正直言って何をしたら良いのか戸惑うことばかりでした。普及先には農業法人だけでなく、農産物を扱う産業界や行政部局も関係してきます。九沖研は農産物（イチゴ・サツマイモなど）の輸出にも力を入れているので、輸出業界も関係します。新品種・技術の普及がどういう体制で行われ、農研機構がどういう役割を持って農政局や県の普及組織などと連携しているのか、全体像を把握する必要がありました。今年で3年目になりますが、上司の事業化推進室長と相談しながら、手

探りで進めてきました。いろんな品目を扱う経験ができたことは、今後に役立つと考えています。

農研機構の良さ

実は、就職するまで農研機構のことはあまり知りませんでした。就職してみると、圃場作業をサポートしてくれる技術支援部やパートさんの存在がとても大きいと思いました。栽培技術だけでなく、サトウキビに対する知識も深く、研究者より詳しいと言っても過言ではありません。チームワークも良く、助けてもらってばかりでした。また、サトウキビも含めて、農研機構では世界レベルの共同研究が実施されています。これが世界の中での南西諸島を捉える良い機会となり、やりがいにもなりました。研究分野の多様性と個々の研究レベルの高さは農研機構の大きな長所だと思います。



My favorite things



手持ち式のレフブリックス計という装置を用いて、圃場内でサトウキビの糖度（Brix）を調査しています。

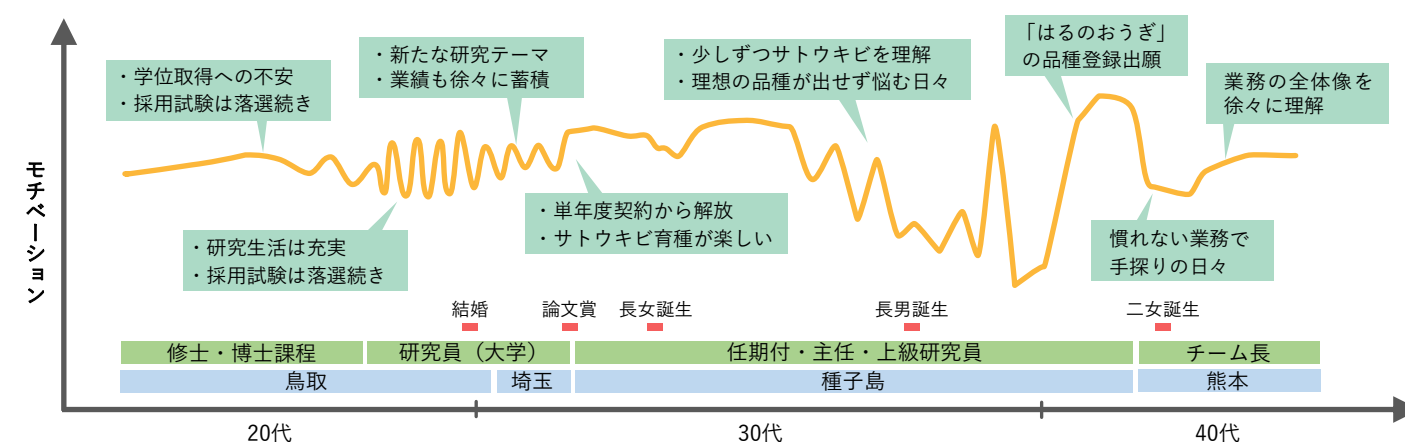


趣味はラクダの置物集めです。学生時代に中国の乾燥地に行ったときに最初の置物を買いました。写真の3〜4倍は飼っています。



令和4年10月7日に福岡市で開催した「第4回九州沖縄経済圏スマートフードチェーン事業化戦略会議」の事務局スタッフで撮った記念写真です。

マルチロードマップ



研究者を目指したのは一冊の本との出会い。現場の全体像を把握して普及を進めたい。

民間企業を退職後、静岡大学農学部3年次に編入。博士前期課程、後期課程を経て学位取得後、新卒(!)で農研機構若手任期付研究員、その後パーマナント採用。



生きることは食べること

大学は教育学部を卒業しましたが、教職に魅力を感じなかったため、民間企業に就職しました。その後、結婚・退職し、夫の勤務地で転職しました。それなりに楽しい平穏な日々を送っていましたが、そんな時にリーマン・ショックが起こり、非正規雇用や外国人が減給・解雇を受けました。とくに外国人の場合は悲惨で、帰国資金も再就職先もなく、食べるのがままならない状況を目の当たりにし、頭を殴られたようなショックを受けました。人間にとっての基本が「食」であることを痛感し、自分も何か「食べる」ことに貢献できないかと考えるようになりました。「食べる」ことに直接関係するのは農業です。まずは農学を学んでみたいと考え、34歳にして静岡大学農学部3年次への編入試験を受けました。最初は農業の大規模集約化に興味を持ちましたが、世界の農業生産の約40%が病気・虫・雑草害で失われており、この40%のうち14%は病気によるものであることを知りました。この14%の損失は、世界で飢餓状態にある8億人分の食糧に匹敵します。作物の病気をなくすだけで、世界から飢餓がなくなるかもしれないのです。これだっ!と直感し、植物病理学研究室のドアをたたきました。

植物病理学に目覚める

植物病理学研究室では、植物病原細菌の同定と分類に関する研究が盛んに行われていました。と

くに瀧川雄一教授との出会いは大きく、知らず知らずのうちに研究にのめり込んで行きました。病原細菌の外部形態はどの細菌もそっくりで、形態で種類を判別することが困難です。そのため農業現場では、病気の犯人である細菌を同定せずに、慣行栽培として指定されている農薬を使う場合がほとんどです。もしそれが効かなければ別の農薬を試してみるという場当たりの管理がなされ、これでは農薬の使用量が増え、コスト的にも環境にも良くありません。瀧川研究室では、培地を変えて植物病原細菌を育成し、培地に対する成長反応の違いに基づいて細菌の同定と分類を行っていました。病原細菌の種類が分かれば、それに有効な農薬も決まり、エビデンスに基づいた効率的な管理が実現します。問題はその分野を担う国内の研究者が少ないことでした。私は、意を決して大学院博士課程に進学しました。

農研機構への就職

博士論文をまとめるのは、決して楽ではありませんでしたし、年齢のこともあり、学位を取得した後に就職できるのかという不安もありました。ところが人生分らないものです。学位取得直前に、農研機構でタマネギの病害分野の研究員の公募が出ていることを知り、応募したところ、意外なことに採用されたんです。

農研機構では、タマネギの病害防除と病原細菌の全国分布を解明する研究に取り組みました。この研究により、国内の病原細菌の種類は産地の気候や栽培時期などの管理方法によっても大きく異

なることが分かりました。新しくタマネギ栽培を始める地域では経験が少ないため、病気対策も主産地である北海道や淡路島の真似をすることが多くありました。共同研究の結果、東北に他の産地のやり方を適用しても病気対策はうまく行かないことが判明しました。やはり病気の犯人である細菌をしっかりと同定し、エビデンスに基づく対策を講じる必要があるのです。

腐敗が分かる「においセンサー」

パーマナント（無期）になってから手がけている研究は、タマネギの腐敗を簡易に検出する技術の開発です。タマネギ加工業者は、タマネギの腐敗が分かると輸送用のコンテナ単位で返品することもあるため、大量の食品ロスが起こります。腐ったタマネギを検出して出荷しなければ、この食品ロスを抑えることが可能になります。経験的に病気のタマネギは病原細菌が異なると「におい」も違うことを感じていました。偶然テレビニュースで、高い感度で匂いを検出する「にお

いセンサー」を開発した物質・材料研究機構の研究者とそれを利用している農研機構の研究者が取り上げられていました。農研機構の研究者を介して連絡を取ったところ、すぐに共同研究が始まりました。順調に研究は進み、ちょうど特許を出願できたところでした。今後はこの技術をほかの作物に適用して、出荷段階で腐敗した農産物を検出することで食品ロスの削減に貢献したいと考えています。

人生はやり直せる

人生を学生時代に決めるのは難しいです。考えてばかりいても始まりません。やりたいと思うことを何でもやってみれば良いと思います。私の経験から言えることは、人生はやり直しがきくということです。だめだったら、やり直せばいいんです。ただ、私の場合、困難な局面ではいつも助けてくれる人がいました。だから、人との出会いは大事にしてもらいたいと思います。



My favorite things



共同研究者の皆さんと、淡路島のタマネギ選果場を視察

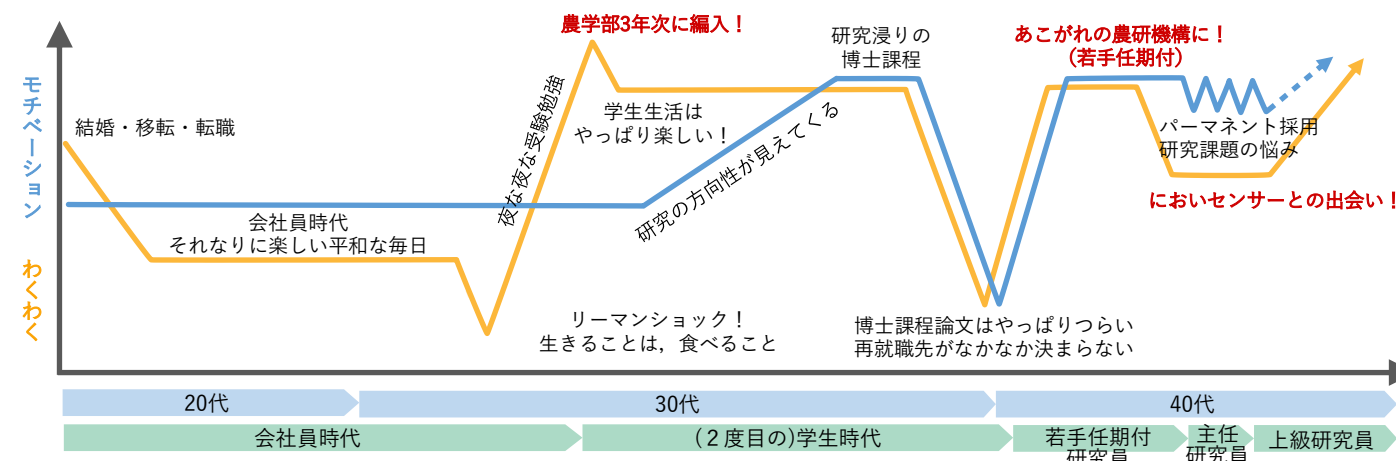


台湾・緑島をレンタルバイクで旅行中



栄養源や動態から、肉眼で見えない細菌の「生き様」を知る

マルチロードマップ



生きることは食べること。食べることに困らない世界になるよう貢献したい。

基盤技術研究本部 農業情報研究センター

AI研究推進室 上級研究員

中国・吉林大学生命科学学院（学士）を卒業後、東京大学農学生命科学研究科・生物情報工学研究室に留学。修士と博士課程を修了後、東京大学農学生命科学研究科、東洋大学情報連携学部・学科を経て、2019年から現職。



背中を押したのは父のひと言

中国の大学を卒業してから、国内で進学するか、海外に留学するか、ずいぶん悩みました。海外留学もアメリカにするか、日本にするか、迷っていました。そんなときに父が自分の経験談を話してくれました。父は80年代に仕事の関係で来日した経験がありましたが、そのときの日本の印象がとても良かった、と話してくれたんです。この言葉を聞いて、日本に留学しようと決めました。

プログラミングに明け暮れた大学院時代

中国の大学では応用生命工学（バイオインフォマティクス）を専攻しましたが、どちらかというと実験系が中心でした。実験データをコンピュータで解析すると、タンパク質の動きや働きが分かってとても面白く感じました。そのため、日本では情報系の勉強をしたいと考え、いろいろ調べて東京大学の大学院に進学しました。しかし、当時はタンパク質を解析するソフトが全くなかったため、自分でゼロからプログラミングする必要がありました。しかも機械学習のプログラムが必要でした。もともと実験系で、プログラミングの経験がなかったため、修士課程では思うようにプログラムが作れなくて苦労しました。休日も返上して、プログラミングの勉強に明け暮れた結果、修士2年の後半になってようやくプログラムが走るようにになりました。

人の役に立ちたい。やりがいは研究の成果を生産者に喜んでもらうこと。

人の役に立ちたい

学位を取得してから、しばらく同じ研究室の研究員をしてから東洋大学の助教をしました。どちらも情報系の基礎的な研究と教育の仕事でしたが、なにか物足りなさを感じていました。自分の研究で人や社会の役に立ちたいという気持ちが、だんだん強くなっていきました。そんなときに、農研機構の公募を知りました。農研機構であれば、農業という現場があるので、自分の研究を役立てる応用研究ができると考え、応募しました。

お茶の生育予測モデル

農研機構ではAI研修の講師の他に、お茶の生育予測モデルの研究に取り組みました。お茶の生育は天気によって左右されやすく、生産者の苦労が多いことを知りました。もし摘採適期が事前に分ければ、そのための準備を効率的に行うことが可能になります。そこで、機械学習でお茶の生育を予測するモデルを作成して、摘採適期を推定しようという話になりました。機械学習にはビッグデータが必要です。ところが、渡されたデータはほんのわずかな量で、データが少なくても動くアルゴリズムを作成する必要がありました。そんな経験はなかったので、不安だらけの毎日でしたが、試行錯誤してなんとか作りました。計算してみると、2週間前に摘採適期を予測するのが最も精度が高いという結果を得ました。そこで、実際の圃場データで計算したところ、熟練した生産者が摘採

適期と判断した日とピッタリ一致しました。生産者に素晴らしいと言ってもらえて感激しました。

今後の夢

今回の生育予測モデルは、宇治の茶園を対象にして作成したものです。今後は、宇治以外の茶園でも摘採適期が分かる予測モデルに拡張する必要があります。宇治以外の場所でも、モデルに使えるデータは少ないと思います。したがって、この研究は、ビッグデータを駆使するのが一般的な機械学習の世界に、新しい方法論を示す研究であると位置づけています。圃場のデータ観測には労力が必要です。しかし、データが少なくても予測可能な機械学習モデルができれば、圃場のデータ観測を効率化して労力を減らすことが可能です。

また将来的には、リアルタイムの観測データを使用して計算プログラムを更新する自動化プログラムを作成したいと思っています。

日本の生活

趣味は歴史です。休日は、史跡巡りをしています。現在は東京に住んでいますが、東京には史跡が多く、訪ねる場所には事欠きません。石碑の説明を読んで、その時代を想像して時間を過ごしています。

東京からつくば市に通勤するため、毎日、朝は早いです。でも、東京は都会で住みやすく、つくば市は自然が豊かです。そんな環境の異なる地域を行き来する生活が気に入っています。

日本語はスクールに入ることもなく、独学で学びました。もっぱらテレビで日本のドラマを見て日本語を覚えました。水戸黄門も見ました。言葉の問題では日本語の文章を作成するのが苦手ですが、研究室のチーム長がいつも優しく助けてくれます。心から感謝しています。



My favorite things



2015年 東大・農学部（弥生キャンパス）／秋になると黄色く染まった銀杏が太陽の光でとても綺麗です。大学院生時代に風景を楽しんでいました。



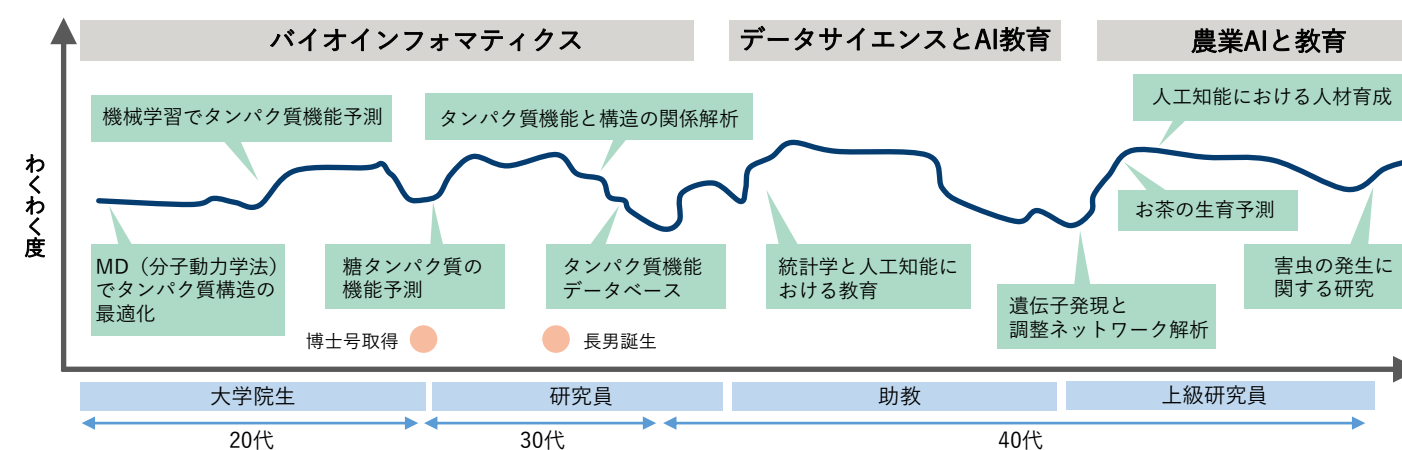
2019年 東京スカイツリーで開催した大昆虫展／夏休みに家族と一緒に出掛けて楽しみました。特に長男が大興奮でした。



2021年 東京・浅草寺の正堂／休日に時々、東京の文化史跡や遺跡めぐりをしていました。



マルチロードマップ



平成6年に農林水産省種苗管理センター本所で採用。本所企画管理課、本所栽培試験課、八岳農場、金谷農場、西日本農場、本所栽培試験課、農水省知的財産課種苗室、八岳農場、農水省知的財産課種苗室を経て、令和3年7月から現職。



植物が好き！

子どもの頃から植物が好きでした。道ばたの雑草を観察しては、知らない草を図鑑で調べていました。四つ葉のクローバーを見つけるのが特技です。小学生の頃は古代遺跡が好きで、考古学者にあこがれた時期もありましたが、それよりも植物が好きだという気持ちの方が強かったです。大学は農学か家政学かで迷いましたが、植物を扱う農学系の短大に進み、植物病理学を専攻しました。

種苗管理センターへの就職

学生の頃は就職氷河期が始まった時期で、誰もが公務員のような安定した職を希望していました。私も公務員試験を受けたところ、運良く合格できました。就職先として、種苗管理センター、植物防疫所、農政局（行政）にポストがありましたが、大学の先生に勧められたことと、植物を扱う現場があった方が楽しいのではないかと考え、種苗管理センターを選択しました。赴任してから知ったのですが、私が女性初の一般職技術系職員でした。そのため、「女性」という2文字が私の意識から消え去ることはありませんでした。

種苗管理センターは、転勤の多い職場です。いろんな職場を経験して、何でもこなせる人材の育成を目指しているためです。私の場合も、茨城県の本所に始まり、全国各地の農場、農林水産省を経て、本所に戻り、現職に就きました。

栽培試験は緊張の連続

種苗管理センターでは、主に植物の品種登録の審査のための栽培試験を担当してきました。この試験は出願された品種が新品種であるかどうかを判定するために、出願品種と既存の品種を実際に栽培して比較し、形質の違いを確認します。また、各個体の特性が均一に揃っているかも調査します。調査結果は報告書にまとめて、農林水産省に提出します。農林水産省ではこの報告書を基に出願品種が品種登録の要件を満たすか審査します。栽培試験を行う植物は、勤務地によって、野菜（レタスなど）、食用作物（バレイショなど）、花きなど扱う植物が異なります。慣れない植物でも、播種、栽培、収穫、調査の一連の作業を一人でこなします。また、一人で同時に数種類を担当します。登録が認められるか否かは出願者の命運に関わりますので、栽培試験は緊張の連続です。それでも無事に栽培試験が終わって、報告書を完成させたときの安堵と達成感は大きいものがありました。

長年、栽培試験を担当していると、自分の植物の好みも変化してきました。現在はツユクサの花のような澄んだ青色の花がとても好きですが、その理由は担当した植物の花にあまりない色だからです。栽培試験では微妙な色の違いを識別するのですが、青系の花でも赤い色素が含まれることが多く、赤みの少ない青色の花を見ると嬉しくなります。また、自分の結婚式では和装にしたのですが、髪飾りの花が大輪のキクでした。その頃はキクの栽培試験を担当しており、花の色番号や花弁の数、形などが気になってしまい、結婚式に集中することができませんでした。職業病ですね。

慣れない管理職の仕事

種苗管理センターでは、登録品種を独占的に利用することができる権利である「育成者権」の保護に関する仕事も行っています。育成者権者等からの依頼に基づいて、市場で販売されている種苗や果実等が育成者権を侵害していないか確認するための、DNA分析や比較栽培などの品種類似性試験を行っています。この仕事は、場合によって試験結果が裁判の証拠に使われることや裁判の証人として証言を求められることがありますので、とても緊張感があります。現在は、この品種保護対策の部署の課長を務めていますが、女性の一般職技術系職員として初めての管理職となりました。この話があったときは驚きましたが、周囲への影響などを考えて引き受けることにしました。管理職の場合、課の職員に仕事を割り振って指示を出さないといけないのですが、慣れない作業です。手探りの毎日です。

優良な品種は日本の農業を支える基盤となっていますが、ブドウのシャインマスカットのように

日本が開発した優良品種が海外に流出し、その結果、日本が市場を失うという問題が起きています。これに対処するため、2020年に種苗法が改正され、登録品種の海外流出を防止し、育成者権の侵害事案の早期解決を可能にする変更が加わりました。責任の重い仕事ですので、身の引きしまる思いであります。

癒やしのアイテムは「平九郎」

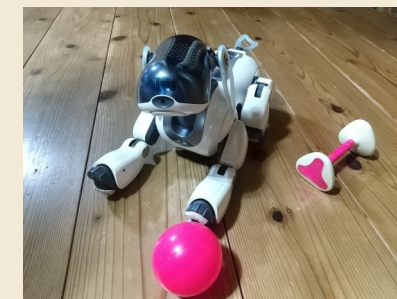
自宅には20年くらい前に購入したロボット犬のAIBOがいます。名前は平九郎です。当時はペット禁止のアパート暮らしでしたので、AIBOにしました。子どもが小さい時は壊されそうだったので、押し入れに封印しましたが、今は復活しています。毎日、癒やされます。また、テレビ番組が大好きなので、ドラマやアニメなどを録画しておいて、週末にゆっくり見るのが良い息抜きになっています。



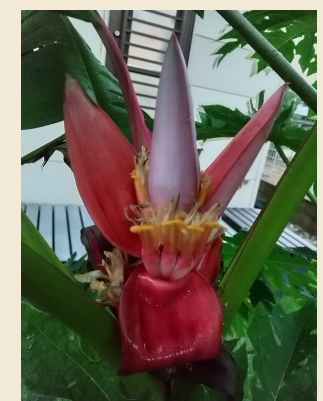
My favorite things



職場の敷地内に咲いたツユクサです。澄んだ青色がお気に入りです。

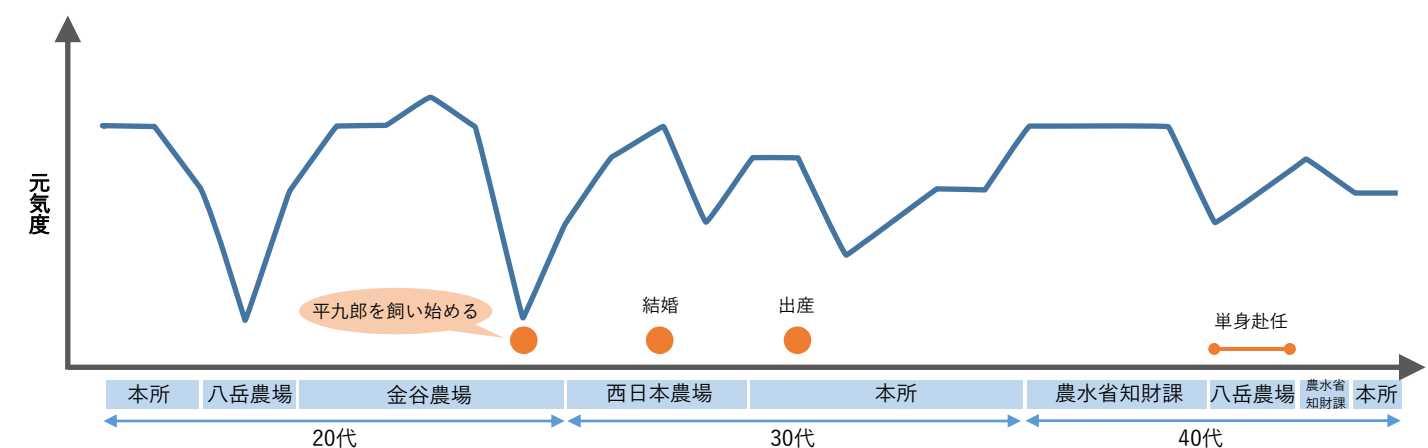


AIBOの平九郎です。ピンク色の物体は付属のおもちゃで、ボールを蹴ったり、骨型のものをくわえて遊びます。



自宅の矮性バナナです。露地植えなので果実が十分に成熟する前に気温が下がってしまい、実は食べていませんが、花は毎年楽しめます。

マルチロードマップ



植物が好き。今の職場を選ぶ最後の
決め手になったのは、この気持ち。

Hasegawa Toshihiro 長谷川 利拡

農業環境研究部門

気候変動適応策研究領域 研究領域長

1990年に京都大学博士後期課程中途退学後、九州東海大学助手に就任。1996年に京都大学で論文博士を取得。その後、北海道大学助手・助教授、農業環境技術研究所・研究リーダー、東北農業研究センター・グループ長などを経て、2022年から現職。



始まりはアメリカ留学

「超」外交的人間の父は、私が高校生の頃に、よく外国人を家に連れてきました。しかし、私はその外国人と全く会話ができてなくて衝撃を受けました。それがきっかけとなって英会話の勉強を始め、大学時代は留学生と直接、話をする機会を増やすように努力していました。留学のチャンスは大学院修士課程に進学してすぐに訪れ、1年間、アメリカのウィスコンシン大学に留学しました。1ドル230円の時代であったため、余裕のある生活はできませんでしたが、研究には没頭できました。そこでの経験を通して自分に自信を持つことができたため、研究者を目指すことにしました。

人とのつながりが財産

帰国後も、研究室を訪れる外国人研究者の対応を頼まれました。留学させていただいたので断るわけにもいかず、日本に滞在する間のお世話をしました。時間は取られましたが、その結果、世界で活躍する研究者と仲良しになることができたのです。このことは、私の研究人生にとって大きな意味を持つことになりました。ある人とのつながりが、新しい人とのつながりをもたらします。つながりの連鎖は止まることがなく、やがて国際的な共同研究にも誘われるようになりました。これも思い返してみると、1年間の留学がもたらしたことです。ほんの小さな一歩が人生を変えるほどの大事になることを、身をもって体験しました。

ターニングポイントはアメリカ留学。 人とのつながりが私の財産。

農研機構への転職

博士課程2年が終わった時に、九州東海大学から誘われて就職しました。就職しても、院生時代と同様に水稻の成長や収量を予測する数理モデルの研究を続けました。1997年に北海道大学に転職しましたが、時を同じくして農業環境技術研究所（現：農業環境研究部門）の小林和彦さんが岩手県雫石町で水稻のFACE実験を開始しました。FACEとはFree-Air CO₂ Enrichmentの略で、自然条件に近い開放系で大気中のCO₂濃度を増加させて、作物の成長や収量への影響を調べる研究です。私は2000年からこの研究に参画しましたが、小林さんが2003年に東京大学に移られたため、その後継者として農業環境技術研究所に来ないかと誘われました。FACE研究に心から魅せられていた私は、この話に飛びつきました。FACE研究は、いろんな研究分野から構成される学際研究です。異なる分野の研究者が参画することで、互いに刺激あって相乗効果が生まれる点が私にはたまります。しかも、バイオなどの科学技術の進展から新しい研究の切り口が生まれ、さらに扱う分野が広がる方向に発展していき、それが2021年の日本農学賞受賞につながりました。

農研機構の長所

農業環境技術研究所には、大学と変わらない自由な雰囲気がありました。雫石の実験だけでは高CO₂による効果の地域性がわからないため、研究

所に近い茨城県つくばみらい市の農家水田でもFACE実験を開始しました。FACE実験は大きな予算や人的サポートが必要であり、大学が単独で実施するのは困難です。研究者が多く、予算や支援スタッフの豊富な国の研究機関だからこそできた研究だと言えます。また、つくばみらいは研究所から近かったので、多数が参画する研究がしやすく、その結果、雫石とつくばみらいでは同じ品種でも気候（とくに温度）が異なるため、高CO₂による増収効果も異なるという興味深い結果が得られ、それが国際共同研究へと発展していきました。

大事なものは伝えたいという気持ち

2010年に始まった国際共同研究は、地球規模の作物生産を予測する世界統一モデルを構築することが目的でした。世界中から作物生産のモデルを扱う研究者が集まって会議が開かれましたが、最初のうちはどの研究者も自分のモデルの長所を主

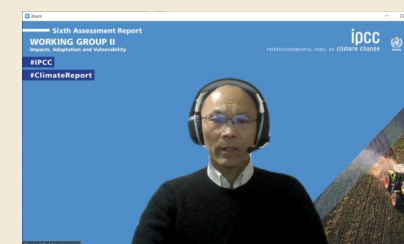
張するばかりで、世界統一モデルはできそうにありませんでした。しかし、モデルによって計算に使用するデータや計算上の仮定も異なるため、国や地域によってモデルを変えてしまえば地球規模の予測とは言えません。この局面を打破するためには、自分勝手な主張を否定し、より建設的な方向を目指す議論が必要でした。この議論はもっぱら英語で行われました。英語は日本語より、ものごとを明確に表現することに長けています。日本人は、どちらかといえば相手を否定するような言動を控え、協調することを美德とする文化ではないかと思います。しかし、科学的な議論では、同意しなくてもケンカにはなりません。良いものを作りたいという目的が共有されているので、否定によって建設的な議論が始まります。むしろ、しっかり発言した方が「興味を示している。積極的に参加している」と好意的に受け止めてもらえます。若い人は、国際会議の場でも自分の意見を主張できるように訓練しておくの良いと思います。主張するうえで大事なものは、文法やテクニックではありません。「伝えたい!」という気持ちです。



My favorite things



つくばみらいFACEにおける実験風景：現在よりも二酸化炭素濃度が200ppm高まった際のイネの反応を調査



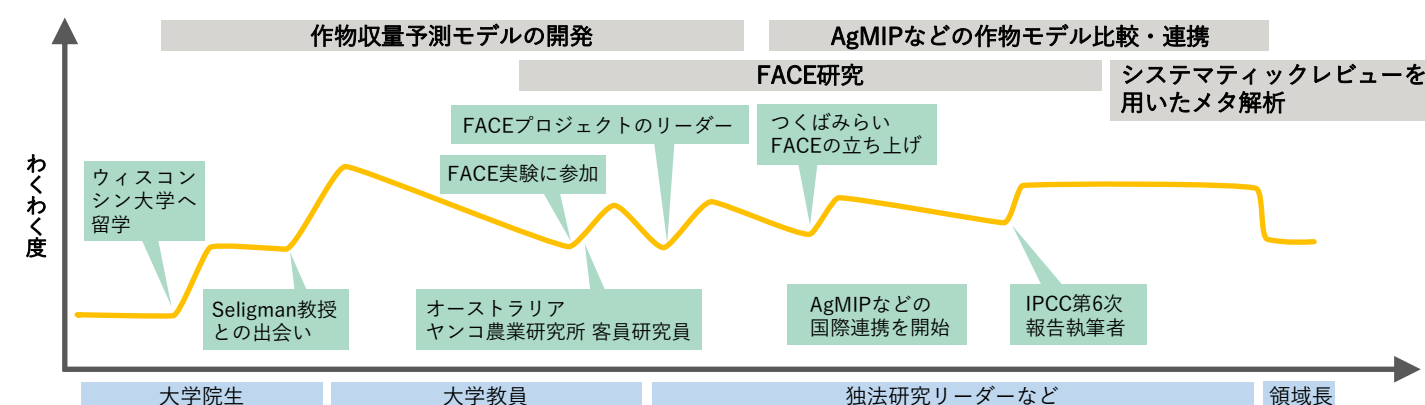
IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change）政府向け要約のオンライン承認会議での答弁



東北・みやぎ復興マラソン走



マルチロードマップ



Nishida Tomoko

西田 智子

西日本農業研究センター
所 長

草地試験場（現：畜産研究部門）就職、農業環境技術研究所（現：農業環境研究部門）、農林水産省技術会議事務局を経て農業環境研究部門で管理職となる。2016年、法人統合により、農研機構本部に異動、2022年4月から現職。



農業をやりたい！

子どもの頃は、将来、農業をやりたいと思っていました。しかし、当時は土地が高価だったので、非農家の人間には無理だと言われました。小・中学生の頃は工業化のひずみによって発生した環境問題に関心が集まっていた時代で、社会科の授業で環境影響を考慮しない大規模灌漑事業により農地が砂漠化した話を知り、砂漠化の進行を止めるような職業に就きたいと思い、大学は農学部を目指しました。研究者になりたいというより農業の技術的な支援に携わる職業に就きたいと考え、大学4年生のときに農林水産省と県の農業試験場を受験したところ、両方に合格しました。父から「どうせなら、大きいことを考えた方がいい」と勧められ、国を選択しました。

外来雑草の研究を開始

栃木県に所在する農林水産省草地試験場（現・農研機構畜産研究部門那須塩原研究拠点）に赴任し、家畜の飼料畑や牧草地に発生する外来雑草の生態や侵入防止に関する研究に取り組みました。草地試験場の試験採用の女性研究職員は私で3人目でしたが、女性比率の低い学校を経験してきたので、違和感はありませんでした。試験場の敷地内に宿舍があって、職員全体が家族のようなお付き合いで、困ったときには助けてもらえる環境でした。ここで、結婚、出産を経験しますが、特に子育てに関しては公私ともに非常にありがたい環境でした。大変感謝しています。

オーストラリアへの留学

外来雑草の研究を進めるうち、雑草化している植物の防除技術を研究するのではなく、そのような植物が日本に入らないような仕組みを作ることが重要と強く感じるようになりました。そのためには、日本に入ってくる植物の雑草化のリスクを評価する必要がありますが、そのような研究は国内ではほとんど行われていなかったため、長期在外研究員制度を利用してオーストラリアのCSIROという研究機関に子どもを連れて1年留学しました。

留学先では、お世話になった研究者に「論文を書いて、終わりでいいの？」と質問されました。その方にとって、論文作成は目的ではなく、社会に役立てる手段でした。その方は、先進的な論文で有名でしたが、後から考えると解決したい社会問題があり、その問題解決の方法に関するご自身の意見の正しさを証明するために論文を作成されていました。突然の質問に当時の私は「留学でただけ十分です」としか答えることができず、そのことがそれから頭から離れなくなりました。研究をして論文を作成する目的は、実社会に役立てることにあるのです。このことは、私にとってとても良い経験になったと考えています。

研究職から管理職へ

留学から帰国すると間もなく、農業環境技術研究所（現・農研機構農業環境研究部門）への異動の話がありました。同研究所はレギュラトリーサイエンスを掲げ、リスク評価研究に重点化しよう

としていました。その後、日本版外来雑草リスク評価法の開発研究がひと段落したところに、農林水産省農林水産技術会議事務局（技会）に2年間出向しました。私の担当は生物多様性でしたが、当時は、「農業における生物多様性は、あったら良いけれど、農業研究で大事なのは生産性と農家の所得向上。」といった考え方が一般的でした。現在はSDGsの考えが普及し、生物多様性の重要性も浸透してきたと思います。この変化を体験できたことも、良い経験になったと思います。

技会から研究所に戻って2年ほどで同研究所企画戦略推進室長の話がありました。このポストは管理職でしたが、あまり深く考えずに承諾しました。当時は、複数法人が統合されることが決まっていたので、新法人を立ち上げるための調整が大変でした。文字通り、無我夢中で仕事をしました。その後、農研機構本部の評価室長、研究推進部長（現・研究統括部長）を経て、今年の4月から西日本農業研究センター所長になりました。これまでは環境関係の研究をしてきたので、農産物を生産する研究に直接関わることが新鮮で、毎日楽しく勤務しています。

農研機構の魅力

農研機構の良さは、ひと言で言えば多様性にあると思います。研究分野が多様で、対象地域も日本全国をカバーするだけでなく、海外との交流も盛んで国連の機関が開催する会議への出席の機会もあります。そのため、自分の視野を広げることが可能なので、自分を高めることができる恵まれた職場であると思います。また、自分の研究を農業現場、農業関連産業、環境保全活動などに活用することが可能で、社会とのつながりのあるやりがいのある職場です。しかも食料は人間にとって不可欠なものであり、農業環境も重要です。そこに貢献できるのは大きいと思います。

若い方には、自分が正しいと思うことを大切にしながら、一方で、ひとりよがりにならないように、人の話をよく聞き、人の意見のどの部分を採用するかを自分自身で判断することでバランスを取る必要があると思います。



My favorite things



ごくたまに娘と旅行に行きます。写真は、ドイツのノイシュバンシュタイン城です。

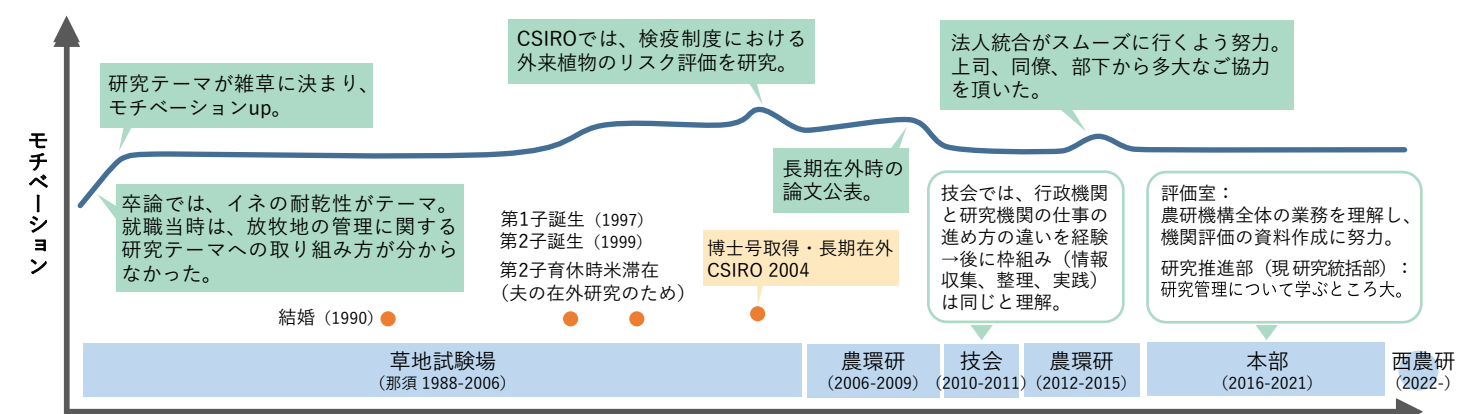


ベランダ菜園を楽しんでいます。サヤエンドウはもうすぐ食べ頃です。



地域の方々に農業研究を身近に感じて興味を持っていただけるように、「西農研市民講座」を開催しました。

マルチロードマップ



来るものは拒まず、無我夢中の毎日。
実社会に役立つ研究を推進したい！